
姉ちゃん、諦めなよ

東雲よはんそん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

姉ちゃん、諦めなよ

【コード】

N0013N

【作者名】

東雲よはんそん

【あらすじ】

静貴の姉、奏は事故にあい半年前から意識不明のまま入院している。

このまま姉の意識は戻らないだろうと諦めかけていたころ、病院から意識が戻ったとの連絡をもらい、喜び勇んで病室に向かったら、予想外の光景が広がっていた……。

登場人物一覧（前書き）

「自宅にて」

までに登場した主要人物を紹介します。

そのため多少のネタバレを含みますのでご注意ください。

登場人物一覧

石村静貴 いしむらしずき

21歳

大学3年生。頭が良くて、私立の有名大学に特待生で入学。成績もそこそこいい様子。

第一希望の会社に内定ももらい、将来安泰。

人並に運動はできるが、根っからの文系タイプ。

石村奏 いしむらかなで

25歳

社会人4年目。静貴の姉。

家から電車で30分くらいのところにある会社でOLをしていた。半年前から意識不明で入院していたが、このたび復活。意識不明な間、異世界に召喚されていたらしい。

ヴィラ・テイリー

19歳

異世界にある王国パラフィアの王国魔術師の一人。ウィルの双子の妹。

召喚術の実験に失敗し、奏を召喚してしまった。

魔術師としてはパラフィアの中でも上位に入る実力者。

マイペース。感情の起伏は激しいが、声や表情に出ない。

銀髪に紅い眼。

ウィル・テイリー

19歳

異世界にある王国パラフィアの王国魔術師の一人。ヴィラの双子の兄。

ヴィラと同様に、奏の異世界召喚の原因の一人。

魔術師としてはパラフィアの中でも上位に入る実力者。

冷静を装うが不測の事態には弱い。比較的常識人。

銀髪に碧い眼

アレクセイ・ソフィア・パラフィア

23歳

異世界にある王国パラフィアの王弟。今のところ王位第一継承者。

基本的に俺様。

愛称はアリョーシャ。これを奏に呼ばせたいが、呼んでももらえない。

ちなみにお王族のフルネームは、個人名・母の名前（国王になった時に前国王の名前が入る）・パラフィア

ジョエル・ブランシャル

27歳

アレクセイの護衛騎士。パラフィアではグウィン伯爵の地位を持っている。

双子曰く、怒らせたらたぶん一番怖い、腹黒い似非紳士。

はじまり

私と弟は、異性の兄弟としては仲がいいと思う。

両親は三年前に死んでしまった。

当時、弟は高校三年生で、受験を間近に控えていた。当時の私の給料では、弟を大学へ行かせてあげるのは難しかったけれど、彼は、特待生プラス奨学金、という素晴らしい結果を残してくれた。それでも金欠で生活に困ることもあったけれど、何とか乗り越えることができた。

そんな弟は、今、大学三年生。もともとの出来の良さも手伝ってか、この不景気の中、もうすでに第一希望の会社から内定をもらった。

二十五になった私は、それなりにまじめに仕事をして、それに見合った分だけ収入も増えた。

お互い一人暮らしをしてもよかったのだけれど、弟は学生だし、出来る限り金銭面では援助をしたかったこともあって、今も二人で暮らしている。

今日の夕ご飯は、弟の好きな豚の生姜焼きにするつもり。

スーパーで購入するものを考えつつ、会社を出た。

なのに今、なんでこんなことになっているのだろう。

私の周りは赤い液体が水溜りのように広がっていく。体中が痛い。視界に移るのは、横転して炎上しているトラック。人ごみ。

ああ、事故だ。

この液体は私の血。

体が動かない。誰かがしきりに話しかけている気がするけど、何を言ってるのかわからないし、声も出ない。

……私は死んじやうのかな？

そうしたら、弟はどうなるの？ 両親を亡くしたショックで私が使い物にならなかつたとき、弟は受験を控えた身なのに、自分自身もすぐくシヨックを受けていたのに、それを隠して私の事まで気にかけてくれた。私に隠れて何度か泣いていたことを知っている。

私まで事故で死んでしまったら。きっと大きなシヨックを受ける。あの時は二人で支えあえたから乗り越えられた。私が死んだら、あの子は一人になってしまう。

どうしよう。

死にたくない。

死にたくない。

『……く……つたわ。ほら、もうすぐ……』

私の意識は、そこで途絶えた。

諦めという名の

『うまくいった。ほら、もうすぐ……あれ？』

聞こえたのは少女の声。

うつすらと目を開けた時、飛び込んできたのは銀と赤と青。

『……あれ？』

『……ミスった？』

「こんにちは。石村さん」

「こんにちは。今日は姉の様子は？」

「そうね、とくにこれといった問題はないですけど……」

毎日繰り返している事。

朝、大学に行く。夜、病院に行く。

病室にいるのは静貴の姉、奏。

半年前から変わらずに続く見舞いに、だんだんと病院内での知り合いは増えていく。だが、変化はそれだけ。

奏は今日も相変わらず眠り続け、それはきつと明日も変わることはない。

「姉ちゃん、今日も来たよ」

静貴は、ゆっくりと眠る奏に近づいた。半年前の傷はすでにほぼ完治している。ただ、目を覚まさない。それだけ。

「いつになつたら目を覚ますんだよ……」

ベッドの横にある椅子に腰かけて、奏を見つめた。つぶやいた言葉にこたえる声はない。

少しだけあいた窓から入る風がカーテンを揺らして、夕焼けの光が室内をやさしく照らす。奏太は、窓を閉めて、カーテンをひいた。そして、無機質な蛍光灯の光の下、もう一度奏を見つめた。

両親が死んだ時、静貴は大学受験を控えていた。奏は社会人一年目で、二人の生活は一気に苦しくなった。

遺産とか保険金とか、そういったものはちゃんとあったけれど、「これから先に何かがあるかわからないこともあって、簡単には手を出せない」奏はそういつて、こまで以上に忙しく働くようになった。それでも、静貴にはお金の事は心配しなくてもいい、と疲れを隠して笑う。

だから、ものすごい努力をした。その結果が、無利子での奨学金と特待生での合格。国公立で無かったことで多少の負担はあるが、それでも満足のいくものだったと今でも思っている。

大学に受かってからは静貴もアルバイトを始めて、二人で頑張ってきてもうすぐ三年が経つ。まだ、苦しいときはあるけれども、ある程度の余裕も出てきた。第一希望の会社にも内定をもらえて、大学を卒業したら奏に恩返しをしていこう、という時に。

今度は奏が事故にあった。

居眠り運転の車が信号無視をして横断歩道に突っ込んだらしかっ

た。

警察からの連絡を受けて、大学を飛び出した。それから、手術を終えた奏を見るまでの記憶はほとんどない。

静貴にとつて、奏は唯一の家族。奏がいたから、両親の死を乗り越えることができたと思っっている。

（姉ちゃんが死んでしまったら……）

何度も最悪の事態を想像して、その度にそんなことを考える自分を戒めてきた。

必ず意識が戻る。そう信じて、あっという間に半年が経つ。

今日は目が覚めているかもしれない。

明日は何事もなかったかのように起きているかも。

毎日そんな期待を抱いて、病室に入って失望する。

それを繰り返していく中で、段々と諦めている自分がある。

生きているのだから。

死んではいないのだから。

そうやって自分を慰めてきた。

そして、諦めた自分を軽蔑する。

たった一人の姉なのに、自分はなんて薄情なのだろう、と。

「姉ちゃん、俺、苦しいよ……」

静貴は病室を後にした。

今日と同じになるだろう明日を思いながら。

『……ちゃん、俺、苦しいよ……』

聞こえたのは弟の声。

帰りたい、と強く願った。

予想外の乱入者

「いやああああああああ！！！！」

「ちょ、カナデさん！」

「……絶叫」

「ね、姉ちゃん！？」

病室に入った静貴は目を疑った。

目覚めたばかりとは思えない豪快さで病室を逃げ出そうとする姉と、それを抑える奇妙な双子。

話は数時間前に遡る。

『奏さんの意識が戻りました。つきましては、少しお伝えしたい事がござりますので……』

家の留守電に病院からのメッセージ。

意識が戻った。

その言葉に、静貴は家を飛び出して病院に向かった。

いつも、はかない希望を抱いては、すぐに現実を突き付けられた病室。

いつしか諦めを抱き、期待するのをやめて、妥協を覚えてしまった。

緊張した手で、病室の扉をたたく。

「はい、どーぞー」

半年前と変わらない声がある。
扉を開ければ。

「静貴、心配かけてごめんね」

困ったように笑う、元気そうな奏の姿。
静貴の眼からは知らないうちに涙がこぼれた。

「姉ちゃん」

「うん」

「よかった……」

「いつもお見舞いに来てくれていたんでしょ？　ありがとう」

奏が優しく微笑む。

あの絶望にも似た日々はもう終わった。

少しの間、静貴は半年間の出来事をぽつぽつと語った。奏はそれを楽しそうに聞いて、時折申し訳なさそうな表情で静貴を見ていた。

「失礼します。石村さん」

軽いノックの音とともに入ってきたのは、看護師と奏の担当医。

「あ、お世話になってます」

「こんにちは。石村さん、意識が戻ってよかったです」

「ありがとうございます」

「これから簡単な検査と問診をしていきますので。……それから静貴君、ちょっとお話があります」

穏やかに笑う医師は半年前からとても良くしてくれている。

その医師は看護師にいくつかの指示を出した後、静貴を呼んで病室を出た。

連れられられたのは診察室のようなところ。

「今回は良かったですね」

そう前置きをして切り出したのは。

なんでも、半年間も寝たきりの状態で入院していた割には肉体的に正常すぎるのだそうだ。通常なら筋肉が衰えて、まずはリハビリから始めなければならぬところをすでに院内を普通に歩きまわれるらしい。

「……まあ、原因は不明ですが、それ以外に今のところ問題はなさそうですし、明日以降から精密検査をしていただいて、問題が無いようでしたらすぐにでも退院できますよ」

「わかりました。ありがとうございます」

色々と思議が残ったけれど、とりあえず退院できる、という事実が嬉しくて。

それを伝えようと足早に病室に戻る。

病室の扉を開けようとしたその時に。

ポフッ！

クッションに思いっきりだいぶするような、あるいはモクモクッ

と煙が立つような不思議な音が中から響く。

「？」

その一瞬後。

「いやあああああああ！！！！」

「ちょ、カナデさん！」

「……絶叫」

「ね、姉ちゃん！？」

冒頭に戻るわけである。

「一体何がどうなってるの！？」

一向に自分を気にしない不審者丸出しな双子と、一心不乱に二人の拘束から逃げ出そうともがく奏。

しかも時折二人に向かって「なんであんなたちまで！？」「とか」「さっさと帰れ！！」などと、知り合いだとうかがわせる叫びが混ざっている。

静貴のもっともな叫びに、ようやく双子がこちらを向いた。

計四人の不審者

「……邪魔者？」

「カナデさん、こちらの方はお知り合いですか？」

ようやく静貴を視界に捉えたらしい二人は、視線をじっと静貴に定めたまま言った。二人の手がなんとなく不穏な動きをしている。それにしても、この双子は珍妙だった。

超有名なファンタジー映画を彷彿とさせる黒いローブ姿。二人とも銀髪だ。けれども、その艶が地毛であることを主張している。瞳は一人が蒼で一人が紅。

これだけで判断すると秋葉原にいても違和感なさそうだ。

「私の弟。てゆうか、さつさと帰ってよ！」

後半のセリフは悲鳴に近い。

静貴は双子をまじまじと見た。

「はじめまして。カナデさんの弟君。僕の名前はウィル・テイリー。こちらは双子の妹、ヴィラ・テイリーです。僕らはパラフィア王国で王宮魔術師をしています」

……。

意味不明な単語がいくつか飛び出してきた。

パラフィア王国。

魔術師。

「は？」

「詳しい事情はのちほどお話をさせていただきます。それよりカナデ

さん」

「え、ちよつと!?!」

意味がわからない。

しかも静貴の問いかけを完全にスルー。

言いたい事は言ったのか、ウィル・テイリーと名乗った蒼い眼の男は自己紹介もそこそこに奏に向き直った。

「大変な事が起こりましたよ」

何が大変なのか静貴には理解ができなかったが、奏には心当たりがあるのか、思いつきり嫌そうに顔をゆがめた。

「そう。大変なの」

「ツ!? わあっつ!!!」

いつの間にか静貴の横に来ていた紅い眼の女、ヴィラ・テイリーが耳元でぼそりと呟いた。

「彼が来ちゃう。カナデの天敵」

天敵。

奏は元々社交的で、人づきあいも上手い。苦手なタイプとすらそれなりの人間関係を築けるスキルのある奏に天敵と言わしめる人物がいたらしい。

「俺、話が見えないんですけど……」

「……私たち、魔術の実験をしたの」

揉めるように言い合いを始めた二人をまるで気にしない調子で話

し始めた。曰く、その実験は半分成功で、半分は失敗したのだとか。
「空間移転の時に、自分のダミーを残す術だったのに、空間ってゆうより次元を超えちゃうし。移転したのが私じゃなくてカナデだったし。踏んだり蹴ったり」

……ダミー？

ヴィラの話からすると、今日、カナデが目を覚ますまでの間、毎日見舞っていたのはダミーってことなのだろうか。

「責任もあるから早いとこカナデを還そうと思ったのに、殿下は殿下で自由だし。……せっかくカナデを還せたのに、殿下が気付いちやうし」

ぶつぶつと呟きながら段々腹が立ってきたのか、ヴィラの眉が少し寄っている。それ以外は表情の変化が無い。どうやら感情を表に出さないタイプらしい。

一方で、ウィルとカナデの言い合いは続く。

「カナデさん、彼はすぐにでもこちらへやってくるでしょう。それを回避するのは不可能だったので、少しでも早く僕らが貴女のところへ来れるよう、ちよつと頑張りましたよ」

自慢げに話すが、奏にとって、とりあえず天敵が来る事には変わりが無い。

奏の顔がどんどん引きつっていく。

「ちよつと、静貴!」

「え?」

いきなり奏はベッド横の収納を開けた。
そして何を思ったかいきなり荷造りを始めて。

「今すぐここから出ていくわ！ とりあえず、帰りましょ！！ も
ちろんこの双子は置き去りで！！！」

「姉ちゃん、それは無茶だつて！ 明日には検査もあるんだし、退
院の許可だつてまだ出てない」

「ええい！！ そんなこと言ってる場合じゃないのよ！！！」

「カナデさん落ち着いてください」

「……無駄な悪あがき」

三者三様の制止も聞かず、荷造りは続く。

「「あ………」」

ポフツ、ポフツ！！

いきなり双子が呟いたと思った次の瞬間、静貴の背後で聞き覚え
のある音がした。

静貴と向かい合うようにして立っている双子の顔は、先ほどとほ
ぼ変わらないがどことなく強張っている。奏に関しては、この世の
終わりが来たような表情だった。

しかも、なぜか背後から殺気のようなものを感じる。

ギギギ、と音がしそうなほどぎこちなく後ろを振り向た。

またもや、ファンタジー映画の王子の様な格好の金髪男と、騎士
のような格好にをした茶髪男というわけのわからない人物が忽然と
姿を現していた。しかも二人とも腰には剣を携えている。……おも
ちやだるうか。

わけがわからない。

わけがわからないけれども、計四人の不審者はなんでかえらく顔が整っている。

まじまじと新たな不審者を見つめていたら、金髪男が射殺さんばかりの視線で静貴を射抜いている。

そして言った。

「……おい、なんだこいつは」

計四人の不審者（後書き）

修正しました

暴力と魔術はやめましょう

「……おい、なんだこいつは」

いやいやいや！ むしろあんた達が何なんだ！！

静貴のもっともな心境は残念ながら誰にも伝わる事はなかった。

目の前の金髪男は、じろりと奏を睨んだ後、後ろに控えている茶髪男へ向かって言い放った。

「おい、この男を殺せ」

「仰せのままに」

ちよつと待て。そんな簡単に殺人がまかり通っていい国じゃないから！

静貴は驚愕の眼差しで男二人を見つめた。

茶髪男は無表情のままですらり、と腰にあった剣を抜いた。コスプレ用品かと思っていたが、どうやら本物だったらしい。

「ちよつと、私の弟に何をする気かしら？」

今にも切りかかろうとしていた男が、ピタリ、と動きを止めた。

視線の先には、怒りMAXな微笑みを浮かべた奏の姿。

「カナデ様、弟とは……」

言いかけて、茶髪男の視線は奏に問うようにちらりと静貴をかすめる。

「ええ、まさにその男が私の弟ですけど？ 一体何をする気なの

かしら、ジヨエルさん？」

「……いえ、カナデ様の弟君だとは知らず、失礼を」

「本当に失礼だわ。この国で、そんなに簡単に人を殺そうと思わないで。パラフィアとは違うのよ。アレクセイ殿下」

「……そのような他人行儀な呼び名はやめてもら」

「他人ですけど何か？ だからこの呼び方に何の問題もないと思いますけれど？」

奏強し。しかし、相変わらず静貴には状況が飲み込めない。とりあえず、パラフィアと殿下、の単語から、金髪男がパラフィア王国ではやんごとなき身分のお方らしい事はわかった。そうなると、ジヨエル、と呼ばれた茶髪男はさしずめあの殿下の専属騎士、といったところか。

「……何、あの人？」

横でげんなりとした顔のウィルへと問いかける。

「……パラフィア王国の国王の王弟殿下でいらっしやいます」

「そんな奴がこっちに來て良いわけ？」

ウィルはあはー、と苦笑い。

「良くないけど。たぶんしょうがないのかも。だって、殿下はカナデが好きだし」

さらりと言ったヴィラの言葉に、なんかすごい単語が混ざってる気がする。

「カナデ、求婚されたから焦ってこっちに帰ってきたんだよね。だ

けど、殿下つてやたらと変に感が鋭いから。私たちが来た事で、カナデも何かを察したみたい。だからさつきすごい逃げたがってたの

「きゅっ……きゅっこん!？」

え、球根、なわけない。

てゆうか、なんかすごいことになってるけど。求婚つて、姉ちゃん、どうすんの。

静貴は驚いてまじまじと奏と金髪男を交互に見つめた。

「石村さん、大丈夫ですか？ 入りますよ？」

「すみません！ ちょっと待ってください!!！」

病室の外から看護師の声。さすがにこの騒ぎに異変を感じ取つたらしい。軽い口調だが、どことなく緊張感を孕んだ声音だった。

「ちょ、姉ちゃん、どうすんの!？ なんて説明すれば」

「知らないわよ。殿下はご自分で何とかするんじゃないの？ こっちは変質者がいますって言えば問題ないんだから」

我が姉ながら、ずいぶんと薄情な言い草である。

そんな言い方をすれば、そこそこ親交があつた様子の銀髪双子まで確実に捕まるだろう。

「姉ちゃん、あんなこと言ってるけど。……いいの？」

「仕方ありません。この世界にはこの世界の秩序があると思うので、使いたくはなかつたんですが……幸い、この世界にも魔力があるようなので。……ヴィラ」

「わかつてる」

静貴には理解できない事を言った後、二人は目を閉じた。そうして、口の中でぶつぶつと呟き、両手を前に差し出して、何やら印を刻む。

二人が目を開けた時、その瞳は発光していた。

「石村さん？ 入りますよ？」

「……行け」

「……」

片手をフツと降るような仕草をした後、静貴の横をピリツとした風が通り過ぎて。

それから一向に看護師の声が聞こえない。それどころか、病室の外から物音ひとつ聞こえてこない。

「何をしたの？」

奏がすごく不審そうな声を出した。静貴も同意したい。

「これから5分かけて、この病院内にいる人すべての記憶から、石村奏という人間が入院していた事実、それに関係する記憶を差し替えます」

「奏はもともと健康そのものなんだから、今のうちにこの病室から石村奏の痕跡を消して、今すぐここを出て。この術の有効範囲内は病院内だけだから、それ以外の人は随時施術していくことになるけど」

「……今までは半信半疑だった。だけど、本当に魔術師なのかも知れない。」

ヴィラの説明は、淡々としていたが、そう思わせるだけの迫力が

あった。

「いつの間にそんな術を開発した？」

感心した声は金髪頭。感心している場合ではない。ってゆうか、この世界で魔術を使うのはいかななものか。

「一からの開発ではありません。忘却術の応用ですよ。……時間がありません。とりあえず、移動しましょう」

わたわたと準備を始めて病院を出る。
向かう先は、必然的に自宅。

「なんでこいつら……具体的には殿下を自宅へ招待しなきゃなんないのよ！」

道中での奏の愚痴に、激しく同意したい静貴だった。

自宅にて

「ずいぶんと粗末なつくりだな」

我が家を見た金髪男もとい殿下が、開口一番そのたまった。直後、奏の強烈な一撃がお見舞いされたのは言うまでもない。

「……別に、無理にいらっしやっつて下さらなくても結構ですよ？」

ものすごい笑顔で、いつの間に持ったのか（そういえば、三日前に傘を病室に忘れていった）、右手の傘を緩く振りながら言った。とってつけたような敬語が奏の怒りを如実に表している。

そもそも、殿下がこっちに来た時点で奏はたいそうご立腹だったのに、その怒りを助長するような発言をするのはぜひやめて頂きたい。いつこっちにとばっちりが来るかとひやひやする。

「……すみません……」

「……」

そこで、素直に謝ってしまうのは王弟殿下といかがなものか。

茶髪男がものすごい微妙な顔をして殿下を見つめていた。

「で、あなたたちはこれからどうすんのよ」

場所は変わって我が家のリビング。いらいらした口調の奏を前にかしくまる異世界人四人を見ながら、静貴は飲み物を準備していた。

文字にするとすごい字面だ。特に異世界人つてところが。

はじめは奏の好きな緑茶にしようと思ったが、異世界にはないだろうと思いなおし、無難なところで紅茶を選ぶ。奏は「お茶なんか出して歓迎しないでいい！」と言っていたが、なんとなく、それは憚られた。何せ殿下ですから。

「俺と親睦を深め」

「絶対いや」

殿下の空気を読まない言動は奏に一蹴された。

「殿下は王位第一継承者でいらっしやいますから。できる限り早く帰国できるに越したことはないんですよね」

「じゃあ早く帰って」

茶髪男のなだめるような言葉にも奏は冷たかった。

「ってゆうか、俺、その二人がよく分かんない」

静貴はお茶を配りながら言った。病室で、王弟殿下だとは聞いたが、求婚の話も聞いたが、茶髪男の事は一切知らないし、殿下についてもよく知らない。……仮にも殿下なら、仮にも奏に求婚しているなら、弟だと分かった時点ですぐに自己紹介しろよ。とか思ったのは内緒だ。だって殺されたくないし。

「すみません。これからお世話になるといふのにほとんどの事をお話してませんでしたね」

あ、世話になる気満々なのね。てゆうか、ここにとどまる事は決定事項だったのか。

ウィルの申し訳なさそうな声に内心突っ込んだのは内緒だ。

「まず、金髪のお方から。彼はパラフィア王国のアレクセイ・ソフィア・パラフィア殿下です。現在の国王の弟君で、王位第一継承権をお持ちです。剣術に関しては国内でもトップレベルですね」

説明を受けて、ちらりとアレクセイを見た。

苛立たしそうにこちらを睨む瞳と目が合う。

(仲良くなるのは無理だ。……知り合い程度の親密さですら築けなさそう)

静貴は五秒で諦めた。

「それから、その横に」

「あ、ウィル、いいよ。自分で」

ウィルの声を遮った茶髪男は、柔和な笑みで静貴を見た。

「先ほどは、カナデ様の弟君だとは知らず、失礼いたしました。私は、パラフィア王国の王国騎士団に所属しています、ジョエル・ブランシヤールと申します。現在は王国にて、アレクセイ殿下の専属護衛騎士を務めています。パラフィア王国ではグウィン伯爵の地位を頂戴しています。あ、ちなみに年齢は二十七です」

どうぞよろしく願います。そう言っただけで締めくくった。

朗らか、というか気さくというか、雰囲気は異世界人の中で一番柔らかい。伯爵というからには貴族な生活を送っているわけ。そういう生活の賜物か。とりあえず、静貴にとって一番付き合いたくさそうな人物だった。

「あと、言い忘れてましたが、たとえカナデ様の弟君でも、殿下を害そうとなさるなら容赦しません」

前言撤回。一番腹が黒くてで、危険人物かもしれない。ついでに言うと、いちばん敵に回したくない。

にっこりと笑って言われたが、目が笑ってないし、そもそも笑って言うような内容ではない。

「……肝に銘じておきます」

静貴はそそくさと奏の隣に座った。そこが一番安全そうだったから。

「で、話を戻すけど、帰るなら早く帰ってほしいのよね」

「たぶん、……無理だと思う」

ヴィラがぼそりと言った。横にいたウィルがヴィラ、と嗜めたが遅かった。奏がぎろりと双子を睨み、「どういう事だか説明してくれるよね？」背後に鬼神の気配すら漂いそうな形相で笑った。

「カナデもわかってるでしょ？ 異世界だから、こことあつちは次元が違うもの。もとに戻るには、座標とか、いろいろ調べなくちゃならない。パラフィアからこつちに来る時だつて、あんなに時間がかかったんだよ。パラフィアからここの座標と、ここからパラフィアへの座標はたぶん違ってるから、一から調べなおさなくちゃ」

「……」

ヴィラの説明に、カナデは深いため息を吐いた。

……ということは、彼ら4人が元の世界へ戻れるのは最短でも奏

の入院期間と同じくらい。……つまり半年近く先になりそうだ。

「時間の流れはおなじみみたいだから、早くても半年近くかかるかも」

「半年……」

いやだ。

奏が頭を抱えている。静貴も頭を抱えたい。半年近くもこの奇怪な格好をした4人をお世話するのか……。庶民が、異世界のやんごとなき身分の方々を。……いやだ。いろいろなハプニングが起こることは確定事項だ。

「そういえば、なんで殿下とジヨエルさんがこっちに来れたんだ？
魔術師だっていないし」

「ヴィラが、殿下は変に感が鋭いって言ったのを覚えていますか？」

もちろん覚えている。殿下達がこっちへ来た時にヴィラがこぼしていたから。

「異世界へカナデさんを送る時、アレクセイ様には内緒にしてたんですよ。彼はカナデさんに想いを寄せていますから、絶対に邪魔すると思つて。で、移転の術は対象者を魔法陣の上に乗せてから術を発動させるんですけど、その術は大掛かりで魔術師二人が詠唱を必要とするほどだったんです。で、あと少しで詠唱が終わるときになって、アレクセイ様が気付いたんですよ。カナデさんが還るつもりだと。で、彼女が帰った直後に強引に僕らの部屋へと入ってきてですな……」

「まだ発動中だった魔法陣に突進してきたから、私たちが止めようとしたらそのまま魔法陣の中に突き飛ばされて、術が発動。その時に見たのが、発動中の陣に突っ込むとするアレクセイ殿下と、そ

れを止めようとしているジョエル」

「発動中の陣に足を踏み入れることがどれほど危険かは私はもちろん、アリオーシャ様もわかっていたはずなんですけどね……必死に止めても火事場の馬鹿力と言いますか、私まで引きずられて足を突っ込んでしまった次第です」

ウィル、ヴィラ、ジョエルさん。三人がかりで受けた説明になんか納得。はじめて会ってまだ数時間だか、ずいぶんとわかりやすい性格の殿下だ。

それから、この三人は意外と殿下とは打ち解けた間柄なのかもしれない。言葉の隅々からそれを感じた。何気にジョエルの言葉なんかは、説明しつつも殿下への嫌みが込められている。

「……アリオーシャって」

「ああ、殿下の愛称ですよ。ごく一部の人間しか使いませんし、アリオーシャって響きに威厳がありませんから、基本的に殿下も好まれないんですが、まあ、この国では一般庶民と変わりませんし、どうぞ愛称でお呼びください」

「お前が言っな」

殿下のドスのきいた声がジョエルを制止するが、ジョエルはへらっとならんと笑ったままのたまった。私は怒っているのですよ、と。貴方なんて愛称で呼ばれるくらいが丁度いいんです、と。

「アリオーシャ様？ 私、以前から申し上げていましたよね？ 魔術の知識が無いのにむやみやたらと足を突っ込むのはおおやめください、と。その双子ですら危険だと言っていたのです。歩く危険物とまで言われているこの双子が！ それをあなたは……」

ジョエルによる公開説教はその後一時間にも及んだ。

殿下の威厳なんてあったもんじゃなかった、とだけここに記しておく。

「歩く危険物。言い得て妙だね。こいつらを目にした時って大抵良くない事が起こるもの。現に今だって!!」

独り言のように恨みを募らせる姉を横目に、歩く危険物と言われているらしい双子の事について、くわしく聞こうと誓った。今後の安全かつ平穏な生活のために。

「で、結局こいつらのおもりは確定事項なの？」

「……日本に来ちゃった瞬間から決まってたんじゃないの？ だって、姉ちゃんしか知り合いないし、この国の勝手をつていうか、常識すらわかってないでしょ？」

説教の傍らで、姉弟が心底嫌そうに今後の事を話し合っていた。

歩く危険物の思惑

同居生活が始まって、三日たったある日の事。
学校に行ってみたい、と言いだした。

あの双子が。

「……だめ」

「なんで？」

「僕たちを連れていった方が、貴方にとってメリットになりますよ？」

だから、連れて行ってください。

間髪いれずに続いた疑問と、脅迫まがいな提案。

そもそもメリットってなんなのか。静貴にはデメリットしか思い浮かばない。断りたい。今すぐに。奇妙な同居が始まった時点で、大学は静貴にとって、唯一のオアシスだ。心の底から断りたい。が。

『歩く危険物』

頭の中をひたすらぐるぐると回り続ける言葉。心なしか顔を青くさせた静貴は、ちらりと双子を見やる。

ヴィラはいつも通りのほぼ無表情。たぶん、純粹に疑問があるだけ、だと思いたい。

一方のウィルは。

こちらの視線に気づくと、ニコリと笑う。その笑顔がものすごい脅し文句を含んでいる。『連れて行かないなら、どうなってもしりませんよ』と。

正直、何がどうなるのかは見当もつかないけれど、とりあえず静

貴にとって良くない事が起こりそうだ。

断る、という選択肢は消えうせた。

「へえ、これが大学、というものですか」

ウィルは感心したように建物を眺めている。

大きな敷地内に、それなりに大きい建物がポツポツと点在して（ざっと十棟前後）木々や芝生は人の手によって規則正しく植えられている。それ以外はコンクリートが地面を覆い、時々自動車が駐車場を目指して走る。生徒は結構な人数がいて、自由に動き回っている。

ヴィラは、きよろきよろとあたりを見回し、なんとなく警戒しているようにも見えた。

「なんか、見慣れないな」

「そうですか？ でも、この色も悪くないでしょう？」

静貴の呟いた言葉に、ウィルはにこりと笑って、自身の髪をつまんだ。その色はあの美しい銀ではなく、輝かんばかりの金髪で、ヴィラは瞳の色も青く変わっている。

ヨーロツパ圏の美形双子。間違っても異世界人には見えない。

「すごい綺麗に色が出る」

「この世界にも魔力が存在していて良かったですよ。じゃないと、帰れませんしね。まあ、魔力が存在したからこそ、カナデさんがパ

ラファイアへ来る事も出来たんでしようけど。それにしても、この国は面白い形で魔力を利用しているのですね」

電器機器のことを言っているのだろう。静貴にはよくわからなかったが、この双子曰く、地球上で使われている機械と呼ばれる物の大半はなんでも魔力を応用した結果らしい。つまり、魔力とは電気ของ事なのだ、と勝手に思った。

魔術師は自身の体に蓄えられている魔力と外に存在する魔力を干渉させ合いながら力を使うのだとか。……人間が蓄えていて大丈夫なのだろうか。

という事を話したら、ヴィラが無表情でこちらを見て「貴方がデーンキと呼ぶものは、この世界に存在する魔力を応用した結果に過ぎない」と言われた。その時の彼女の眼は、お前馬鹿じゃねーの、と言った類の感情を見せていたと確信している。

「それにしても、なんで急に大学に來たいとか言いだしたんだよ」「僕らって、パラファイア王国では天才魔術師と呼ばれてたんですよ」

「へえ……」

「歩く危険物、と呼ばれてるのも嘘じゃない」

「……へえ……」

宣言しておこう。最初の相槌と次の相槌、百八十度意味が違う。

「……動いた」

ヴィラはそう一言だけ返すと、姿を消した。文字通り、消えた。幸い、それを目撃した人はいなかったけれど、今後のために嚴重な注意が必要そうだ。

「何が言いたいのさ……てゆーか、ヴィラは？」

「まあ、僕らは一度、パラフィアから地球へカナデさんを送りました。手違いで僕らもこっちへ来てしまいました」

「……」

ヴィラの事は説明する気はないらしい。

「一度できた事を、天才の僕らが同じ時間をかけるわけないじゃないですか」

「……ってことは？」

「昨日のうちに座標は見つけ出しました。その気になればいつでも帰れます」

よし！ 早く帰れ！！

内心の喜びが顔に出たのか、ウィルはこちらをまじまじと見て。そしてにっこりと笑った。

その笑顔に何か含みがある気がしてしょうがない。

「ですが、このまま帰るわけにはいかないですよ」

「は？」

「アリオーシャ様はカナデさんを想うあまりこんなところまで来てしまったのですから。それを何とかしない事には帰れないと思いませんか？」

「いや思わ」

「という事で、アリオーシャ様とカナデさんをくっつけようかと思いついて、現在彼らには自宅で二人きり」

「はああ！？」

ね、姉ちゃん……なんか危険な香りがするよ。

「ヴィラにはジョエルさんのお相手と、万が一の時のために姿を隠して二人の警護に就いてもらいました」

「……そう簡単にはくつつかないだろう。姉ちゃんは超現実主義者だし」

「ええ、それはもう、パラフィアで身にしみるほど体感しましたよ」

心底疲れた、という言葉が似合うほどの表情でウィルが言う。

けれどそのあとの発言で一気に冷や汗が流れた。

「くつつかないのならくつつけるまで」

「お前が言っと、なんか恐ろしいよ」

「なんでですか？ 大丈夫ですよ」

方法は色々ありますから。

いかにも何かを企んでいるような表情でウィルが笑った。
だからその方法が恐ろしいんだ、とは言わないでおいた。

歩く危険物の思惑（後書き）

ストックがこれで終わりました。

更新が少し遅くなるかもしれないですが、最低でも2週間に一回の更新を目指して頑張ろうと思います。

それから、お気に入り登録ありがとうございます。

ご期待に添えるよう頑張っていきたいと思います。

おまけ

『歩く危険物の思惑 Side・K』と題しまして、奏視点の小話をブログに乗せました。興味のある方はよろしければ。

<http://thedirectorroom.blog.shinobi.jp/Entry/43/>

ちなみに本編とは比べ物にならないほど恋愛色が強いです。私の基準的にはPG-12位な感じで。

奏は最強

大学からの帰路、静貴の後ろを歩くウィルはそれはもう楽しそうな顔をしていた。

なんていうか、勝利を確信した者の余裕？

「シズキさん、どこか寄り道しましょうよ」

子供のように弾んだ言動。足取りは軽すぎるくらいに軽い。静貴は胡乱な眼をしてそれを眺めた。

考えている事は大体想像がつく。奏とアレクセイの事だろう。

「嫌だよ。俺は帰る」

「いいんですが？ お互いに気まずい思いをする事になるかもしれないよ？ ……たとえば、お楽しみの最中とか」

こいつは本当に十九歳なのか。言動がオヤジにしか聞こえない。それにしても静貴にはわからない。

確かに、奏がパラフィア王国にいた間の二人を見ていたのかもしれない。けれど、今現在ここまで拒絶されているアレクセイを見て、なぜここまで余裕が持てるのか。

「ふふ、楽しいですね」

何が楽しいのか。

ウィルの視線は先ほどから道路を歩き来る車を追っている。その口元を笑みが彩り、たまに独り言のように静貴に話しかけている。

「どごが。ってゆうか、絶対に姉ちゃんと殿下はくつつかないよ」「くつつきますよ」

静貴の言葉に間髪いれずに反論が来た。

思いのほか真剣な声に後ろを向けば、先ほどとは違い、少し真面目な顔をしたウィルがいる。

「二人は結ばれますよ」

噛み締めるように言うその言葉は、ウィル自身に言い聞かせているようにも聞こえた。

「言ったな？ もしくつつかなかつたら罰ゲームな」

予想外に重くなった空気に、静貴は思わず冗談めいた事を言ってしまう。

「大丈夫ですよ。言ったじゃないですか、方法はいくらでもあるって」

静貴の心情を察したのか、面白そうにウィルが言った。その顔に、先ほどまでの深刻さはない。

きっと、パラフィアにいる間に色々な事があつたのだろう。

けれど、静貴はそれを聞く気はなかったし、知りたいとも思わない。彼らは異世界から来た人間で、近いうちに自身の世界へ帰っていく。そうすれば、自分たちとは一切関わりの無くなる、幻のような存在なのだ。

たぶん奏もそう思っている。だから絶対に二人がくつつく事はないと静貴は思った。

「ヴィラ？」

唐突にウィルが呟いた。その手は空中をさまよい、何かを掴むような仕草をしている。

「どうした？」

ウィルは顔を青くして、呆然と視線をその手に移した。手の中には、銀髪の髪が一本握られている。

その様子にただならぬものを感じて静貴の顔にも緊張が走る。

「ヴィラに危険が迫ってます。……こんなこと、今までなかったのに！」

言うや否や、ウィルは走り出した。

家はもうすぐ目の前だ。静貴も一緒になって走る。

「ヴィラ！……！」

蹴り破るようにして玄関を開ける。

ウィルの手は青白い煙のような、光のようなものがまとっていて、それが魔術である事をうかがわせた。……が。

「お帰りなさい。ウィル？」

絶対零度の声に、一瞬でその手のものが消えた。

廊下の奥に奇妙な光景が広がっている。

「……ただいま……姉ちゃん？」

完全に目を回したような状態で気絶しているアレクセイ。
その横で息を乱し、汗をぬぐう護衛騎士、ジョエル。

仁王立ちで、手にはいつぞやの傘を持ち、こちらに向かって笑いかける奏。

そして危険が迫っているはずのヴィラはなんでか奏の前で正座していた。

「お帰りー、静貴。……さて、ウィル。私、貴方が帰るのを首を長くして待ってたのっ」

うふっ、と笑う奏はすごく不気味だ。

ウィルもそれを感じたのか、ヴィラを奏を交互に見ながら引きつった笑顔を返した。

「た、ただいま帰りました。カナデさん」

「さあ、ヴィラと二人して良くもくだらない事を企んでくれたわね？ ウィル、ヴィラの横にお座りなさい」

ごくり、と喉が鳴った。

魔王だ。魔王がいる。

ウィルがこの世の終わりのような顔をして奏のもとに向かった。それと入れ替わるようにジョエルがこちらへとやってくる。

「さて、私たちは少し彼女たちから離れていきましょうか？」

疑問形で聞いてはいるが、ジョエルの言葉には有無を言わさない威圧感がある。

「……ここにとどまってもかまいませんが、精神的な疲労は想像を

絶するかとお

「ええ！ ぜひと離れましょう！ 今すぐに！！」

恨めしそうにこちらを見ている双子を奏に残し、二人はそそくさと静貴の部屋へ逃げ込んだ。

数時間後、双子はこの世の終わりを見たような顔で、ふらふらと自室と化した和室でへたり込んでいた。

絶対に帰らない！

ウィルは言った。

もうすぐにでも帰る事が出来ると。

けれどもウィルは言った。

このままの状態では帰れない、と。

「だって、そんな事をすれば殺されかねませんから」

のどかな土曜日。外は穏やかな気候に満ちてる。大学は休みだ。

しかし、残念ながら静貴の心は休まらない。

「……」

目の前で優雅に紅茶をすするジョエルが笑った。

ここは静貴の私室。

今、この家の中には二人しかいない。

奏は久しぶりに仕事に向かった。

病院で入院していた事実は双子が消してしまったので、どうするのかと思っていたが、アフターケアもしっかりと行っていたらしい。

何事もなく職場復帰が叶いそうだと、奏は喜んでいた。……喜んでいたが、奏は知らない。

職場が楽園になるなんてっ！！と高らかに笑いながら出勤した奏の後ろを、ひっそりとして行った歩く危険物に。さらに言えば、その危険物と同伴している奏の天敵、もといアレクセイの存在も。

「ジョエルさんは三人について行かなくてもよかったですか？」

ストツパー的な意味で。

言葉にしなかった部分をたぶんジョエルは正確に理解している。ただ笑って、奏の秘蔵の茶菓子を口に運んでいる。……どこから見つけたんだ、それ。帰宅した奏に怒られる事は確かだろう。

「この国は、私たちの国と違ってとても平和です。法律も、風習も。それにあの双子がいますから。少しの気分転換は必要でしょう？」

ジョエルたちのいた世界を静貴は知らない。奏は知っているが、それを語ろうとはしないし、静貴も聞こうとは思わない。

ただ、異世界人四人は地位も力もある立場の人間で、そういった存在には色々な責務や制限があるのだろうことは簡単に想像がついた。

「あの双子は絶対にカナデさんと殿下を恋人にしたいと画策しているようですが、私自身はそれには少し反対なのです」

「……俺もあまり賛成はしないけれども。なんで？ ジョエルさんは絶対に主人のために！ って協力すると思ってた」

「よく、町の者たちの間で読まれる物に貴族や王族が庶民の娘と恋に落ちてハッピーエンド、という物語があります。……それは単純な物語に過ぎない。現実では起こり得ない。それが身分の差であり、私たちの国の組織を成立させているのです。だから、カナデさんが突然現れ、殿下は恋に落ちた。……ほほえましい話です。殿下は人一倍制約と責務のある立場。息抜きの意味では十分。ただ、それを成就させる事はできません」

そう言いきったジョエルの顔はいたって冷静で、そこに主人への同情なんてものはみじんもなかった。この一見温厚そうな騎士はきつとどこまでも冷静で、どこまでの国に仕える騎士なのだろう。

「人の感情は、理屈では抑える事が出来ないものですよ」
「おや、貴方の口からその言葉が出るとは正直思いませんでした。
……ですが、確かにそれは真理でしょう。ただ、その真理さえも覆
さねばならない立場にいる、ただそれだけのことです」

ドカドカ!! バタンツ!!

「カナデ!」

「だあああ!!!! 信つじられない!! このっ! 最っ低男!
!!!! その双子も!!!!」

階下で激しい物音と共に、アレクセイの声と奏の叫びが聞こえて
きた。

それまでの深刻な空気は一瞬で消し飛び、静貴とジョエルは顔を
見合わせた。

「後をついてくるだけでもストーカーとしてひねりつぶしてやりた
い! が、それは一万歩譲って許すとして!!! 社内までに侵入
してきて私の後輩君に向かって攻撃しようとするとは!!!!!! そ
ういう了見よ!!!!?」

がっしゃーん

何かの崩壊する音がする。

危険だ。このままでは何かじゃなくて、家が崩壊しかねない。

「ね、姉ちゃん……ッ」

静貴はあわてて自室を出る。

「私たちの世界には持ち帰れない感情ですが、ここにいる間くらい……その間くらい自由を謳歌するのはアレクセイ様にだって許されるとは思いませんか？ ……身分のない、この国で、一人の女性と……」

振り返れば、ジョエルは淡い笑みを浮かべていた。

一瞬の、はかない夢のような時間くらい。その夢の中で自由を満喫するくらい。

身分違いの恋をするくらい。

ジョエルは残った紅茶を煽った。

静貴は何も言わなかった。

「つつ！！ あんたなんか！ 今すぐに！ パラフィアに帰れ！！

！！！！」

「いや

「いやですよ」

「絶対に帰らない！！！！」

階下ではいまだに奏の絶叫と、三者三様の意味はおんなじ返答が響いていた。

絶対に帰らない！（後書き）

……ちょっとシリアス気味になってしまった……

お久しぶりです。

中々更新できずに申し訳ありませんでした。

更新ペースはかなり鈍足になりそうな気配が濃厚で、本当に申し訳ないので……どうぞお付き合いよろしく願います。

お気に入り登録、評価をくださる方々、そして読んでくださる皆さま、ありがとうございます。

スローペースながら、頑張っていきたいと思います。

ブログにて、姉ちゃん視点の小話をご用意しました。

ちよっとシリアス？な気配もしないではないですが、よかったらどうぞ。

<http://theadirectorroom.blog.shinobi.jp/Entry/50/>

付きまとう不安

幸せそうな殿下を見るのは久しぶりだ。

そう、確かに幸せそうだ。パラフィアで日々緊張を強いられていた頃とは違い。

しかしジョエルは頭を抱えたい衝動に駆られた。なんだろう、この脱力感。どうしよう、こんな姿を祖国の奴らには見せられない。ジョエルの頭を転職という言葉がかすめた。

「いい加減にして!!!」

リビングに奏の音が響き渡る。

その手には高く持ち上げられた、おいしそうなオカズが盛られた皿。

その奏の周りではだらしなく鼻の下を伸ばしたアレクセイ殿下が、奏のすきについてはその皿の中身をつまんでいる。それを生温かい眼差しと呆れたような緩い笑いで見守る双子と弟君。

ダイニングテーブルを囲んでのやり取りをジョエルは一人リビングのソファに座り眺めていた。

テレビではニュース番組が流れていて、ジョエルはそれを真剣に見ていたのだ。が、もはや集中できそうにはなかった。

「これは何の悪夢だ……」

思わず呟いた。こんな殿下は見たくなかった。

思わず頭を抱えなくなつたジョエルをヴィラがじっと見つめた。

そして、ととと、とやってきてジョエルの横に座る。

「ヴィラ？」

「殿下、楽しそう」

視線をテレビに定めたまま、呟くようにいう言葉には複雑な感情が渦巻いているように思った。

ジョエルはヴィラを見つめて、背後でやり取りを続ける二人に視線を戻した。

「……ごめんなさい」

「珍しい……貴女が自分から謝るなんて。その原因には見当もつきませんが」

普段の自由奔放っぷりと、それを悪いとも思っただけでなかったヴィラを思うと自然と笑いがこみあげてきた。

「だって、きっと辛いから」

何を指しているのか、ジョエルには分かった。

双子は奏と殿下の恋を応援していたが、二人ともちゃんと理解しているのだ。叶ったとしても、それは一時的なものではないという事を。

そして、別れの時に自分たちが嫌な役目を追うだろうことを。

「私たちも、きっと辛い」

あんなに幸せそうな殿下を見るのは久しぶりだった。それだけ、殿下が背負っているものが重たいものだという事だ。

その重たいモノから解放されて、一人の人間としての幸せを感じている殿下。

彼に再びそれを背負わせるのはきつとジョエルの役目だろう。
双子はいくら実力と地位があつても、まだ若い。きつと冷静に、
冷徹にはなりきれない。

自分の役目を思い、ジョエルは自嘲するように笑った。

「ヴィラがちょっと沈んでましたね」

入浴も終わり、後は眠るだけとなったジョエルが静貴の部屋へ入
った時、唐突に言われた。

静貴は椅子に腰かけてジョエルを見ていた。

「心配ありませんよ、ちょっと思い悩む事があつたのでしょ

う当たり障りのない答えを返す。静貴は「ふうん」と言つて、追及
はしない。

奏もそうだ。この二人はある一定の部分から先へは踏み込もうと
しない。それは自分たちの事を異星人だと認識し、いつかわかれて
一生会う事のない存在なのだとして認識している証だ。それゆえに、必
要以上に互いをわかり合う必要は無いと割り切っている。

それはジョエルだって同じだ。

あの双子もきつと理性では分かっている。けれど、心がついてい
かない。だから二人を応援するのだ。何か方法があると信じて。

「殿下はどちらへ？」

「さつきまでいたけど、たぶん風呂じゃないですか？」

殿下もきつと考えている。

とても障害が多く、乗り越えられない壁がある事を誰よりも一番わかっているのはたぶん殿下自身だ。

それでも、動かすにはいられない。

足掻かずにはいられない。

きつと、恋とはそういうものなのだろう。

本当の意味で恋愛をした事のないジョエルにはわからない感情だった。

『人の感情は、理屈では抑える事が出来ないものですよ』

静貴がそう言ったのはつい先日的事。

貴方は経験があるのかと、問いたくなった。純粹に興味があったから。口に出す事はしなかったけれど。

「俺は先に寝ます。明日、一限目からなんですよ」

電気、消してもいいですか？

そう言っつてベッドに上がる静貴のために、電気を消してやる。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

静かに部屋を出た。

そのままリビングへと向かう。

殿下はソファに座り、じつと虚空を見つめていた。ジョエルはそ

の隣に静かに腰を下ろした。

「……………」

全てが思い出になった時、それを抱えて生きていけると。そう思えるくらいに幸せな日々を。

別れの辛さを乗り越えるだけの、幸せな夢を。

「お前の言いたい事はわかってるさ」
「……………」

仮初の幸せにはいつも不安が付きまとう。
それは、この家の中にいる全員が感じている。

(冷静に、冷徹に。……………きつと無理だ)

付きまとう不安（後書き）

ほとんどできかけていたので、ぱぱっと修正してアップしました。

美姫と騎士の影響なのか、ずっと更新していないにも関わらず、最終更新日より倍近くの方にお気に入り登録していただいていたみたいです。

ありがとうございます！！

更新が滞っていてすみません。

たぶんこの後も思いましたところにぽつり、という感じになるかもしれませんが、よろしくお願いします！！

人はそれを真実の愛と呼ぶ

人にはどうしたって限界がある。
それは体力であり、精神力であり、寿命でもある。
そして、想いも。

アレクセイにとって、奏は不思議な存在だった。
突然、わけのわからぬ場所へと飛ばされ、わけのわからぬ事を言われ。けれど、決して冷静さを失わない。

アレクセイの身分の高さや自身の立ち位置の不安定さをしっかりと自覚してなお、変わる事のない、不敬ともとれるくらいの、いっそ清々しいくらいの無遠慮な物言い。

誰に対しても態度を変えることなく、根拠のない誹謗中傷もサラリとかわし、ついでにアレクセイの想いもサラリとかわし。

いつでも笑みを絶やさない。

不思議な存在だった奏は、いつしか大切な存在へとなりつつあった。

「お前を愛している。名を呼んでほしい。そして、呼ばせてほしい」

王族はみだりに名前を呼ばせない。特に異性に対しては。

愛おしい者へ、愛を紡ぎ、愛を乞う時。その想いを相手の名前に込める。

真名乞いと呼ばれるそれは、王族だけに伝わる、求愛や求婚の儀式だ。

「……私もあんたの事、結構好きだよ」

頬を赤く染めて、呟くように零した奏は、それでも名前を呼んではくれなかった。ただ、呼ぶことを拒否はされなかったので、アレクセイだけが奏の名を呼ぶようになる。

それひ引きずられるようにして、ごくたまに奏がアレクセイの名を呼んでくれるようになった矢先に、奏は日本へと帰っていった。

アレクセイだけが知らされていなかった。

あわてて追いかけて日本へ来て、奏の、少しずつ前進していたはずの態度が一気に元に戻る様を見て。

(……)

奏はいつだってある一定の線を越えなかった。

どんなに仲の良い、友と呼べるような人物ができても。どんなにアレクセイが愛を囁いても。表面上、引きずられるように踏み越える事があつたとしても、彼女の心はいつだって冷静で、いつだって未来を見据えて行動していた。

だけど、本当にそうだろうか？

決して踏み越えることなく、冷静に、計算高く。そうあるうとしていたけど、本当に少しも心がアレクセイに傾く事は無かったのだろうか？

結構好きだ、と言った時のあの表情は？ 絶対に呼ぶつもりなどなかったのだろう、アレクセイの名がこぼれ出た時は？

諦めきれない。

限界なんて、そんなものはきつと超えられる。

それこそ、次元を超えて、異世界まで追いかけてしまっくらのこの想い。たとえ受け入れられる事が本当に無かったとしても。それでも諦めきれない。

それでも、足掻いてしまっこの想いこそ。

真実の愛と、人は呼ぶのだ。

「いたっ!？」

誰もいない、リビング。

スパーン、という小気味いい音が響いた。

頭を抱え、テーブルに突っ伏す我らがアレクセイ殿下。その背後にはスリッパ片手のウィルが立っている。

「アリョーシヤ様、何そんな気持ち悪い文章を書いてるんですか？」

「いや、国に戻った時に俺と奏のめくるめく愛の歴史を……」

「あんな馬鹿ですか？」

「……」

「笑えるんならまだしも、意外に重たい内容なんでホント勘弁して下さいよ」

「……お前ら二人が発行しようとしたあの史上最狂にまずい本に比べたら」

「あれは最高傑作ですよ」

アレクセイはこれ以上の反論をやめた。国が滅ぶかもしれないくらいにヤバい実験記録のあの本をもう一度世に出そうと思われたら、本当に国、いや、あの星が滅ぶ。

アレクセイは開いていたノートを閉じて、ウィルに渡した。

「……読めと？」

「違う。処分しろ」

「そこまでは言ってますよ」

「いいんだ。少しすつきりしたから」

愛を語るくらいまでが、奏の中の許容範囲だったのだろう。結婚は確実に踏み越える事のない線の向こう側に存在しているから、急いで逃げた。

だが、彼女の心の中には、確かにアレクセイがいた。……きっと、それは今も。

とりあえずは、その事実があればいい。

結婚と恋愛が決して延長線上にあるわけではない事は、アレクセイにとって常識だ。

恐らく、奏以上にその事を理解している。

それは、人間として少し寂しい事だけでも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0013n/>

姉ちゃん、諦めなよ

2011年5月23日12時09分発行